

校内別室指導支援員による登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の時の人間関係のトラブルにより不登校となり、中学校でも不登校の状態が続いていた。担任やＳＳＷが月１回程度、家庭訪問を実施している。本人は、外出することはほとんどない。

具体的な取組

○不登校対応巡回教員と連携した校内体制

不登校対応巡回教員が校内別室指導支援員と勤務日の調整、他の教員への連絡などの調整を行う。

- ・人数…４人
- ・勤務について…週２日、午前中（給食まで）

※行事予定を確認し、勤務日を変更することもある。

○タブレット端末を活用した支援

教室に入れずに別室登校が続く生徒に対しては、不登校対応巡回教員がオンラインによる面談を行ったり、ドリル型学習コンテンツによる学習指導を行ったりして支援を継続している。



○校内での居場所となる取組

当該生徒は、午前中に登校し、学習を終えた後、別室にて、校内別室指導支援員と一緒に昼食をとるようにしている。ゲームなどのバーチャルの世界でしか人と関わることがなかったため、なるべく学習以外でも人と関われる機会をつくれるようにしている。

○別室の活用による不登校対応

パーティションで区切ることによって、一人一人が、落ち着いて課題に取り組めるようにしている。



成果

昨年度学校に登校することができていなかった生徒が、別室を利用することを目標として、定期的に登校できるようになった。

課題

不登校生徒のうち、関係機関と連携が取れていない生徒に対して、別室登校やＩＣＴ機器を用いた関わりなど、支援の方法を模索していく必要がある。

家庭から別室へ、一步踏み出そうと思える校内別室の取組

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在学時から登校することが難しかった。中学校に入学してからは、教室で生活・学習することができる日もあったが、人間関係や学習について課題が積み重なるなど、様々な理由から学校から足が遠のいてしまった。しかし、令和6年度から本格的に別室支援が始まったことで、週に3日以上登校できる状況となった。

具体的な取組

○別室登校の案内リーフレットの配布

しばらく登校ができていない生徒を中心に、担任や学年の教員がリーフレットを手渡すことで、利用を促している。内容は、「別室で何ができるか」、「いつ開いているのか」などが記されている。利用の仕方や考えも生徒によって違うことを意識できるようにしている。

○生徒会が主体となった絆づくりの取組

生徒会が主体となった取組を通して、人と人との関わりを深める「絆づくり」を実施した。

本校の絆づくりは、あいさつからスタートした。



○不登校対応巡回教員との連携

別室支援員と協力し、個別に相談に応じたり、話を聞いたりすることもある。生徒が自習をしていれば、必要に応じて手助けをしたり、質問に答えたりすることもある。ゲームや折り紙をしているときには一緒に楽しむこともある。

○魅力ある学校づくり

生徒同士の関わりを大切にし、交流を通して安心できる環境を生み出すことを目指した取組を実施した。



成果

今まで登校できなかった生徒がほぼ毎日、若しくは週に数回登校できるようになった。また、別室の中で生徒同士、生徒と校内別室指導支援員でコミュニケーションをとることで、生徒の苦手なことや思っていることをより多く知ることができた。

課題

楽しく過ごすだけの生徒もいるため、校内別室指導支援員や教員は運営方法や方針を見直し、計画・実施に苦慮している。

不登校生徒に関する校内別室支援の実施等について

不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度まで在籍した小学校において、学力不振による学習意欲の著しい低下が原因で、5年生の3学期から不登校状態となり、6年生では4日しか登校できなかった。中学校入学後も3日目から欠席。担任が、校内別室指導支援室への登校を促した結果、4月中旬から、週2、3日来られるようになった。

具体的な取組

○不登校が生じない魅力ある学校・学年学級づくりの推進

各学期で「生徒アンケート」を実施した。その結果から、全ての生徒にとって学校が魅力ある場所となっているかどうか、その結果を分析して、各学年にフィードバックし、不登校を生じさせないための助言を行う。

○デジタル機器を活用した支援

各生徒の学習習熟度が異なるため、学習を行う際は、一人一人の状況に合った学習を行うため、一人1台の学習用端末を使用し、個別対応による学習支援を行い、生徒の基礎学力の定着を図っている。

○不登校対応巡回教員の取組

校内委員会に参加し、不登校生徒に関する情報の共有や支援の検討、連絡会や研修で得た情報の共有を行う。また、家庭訪問を行い、不登校生徒と一緒に登校を行う。その他、校内別室を利用して、面接の練習などの進路指導を行う。

○校内別室の活用

昼休み以外は図書室も利用し、図書室にあるライト付きの机を学習スペースとして活用した。現在、7人の生徒が定期的に利用している。



成果

昨年度不登校だった生徒5人が、週に2、3日登校して学習または作業等に取り組めた。

校内別室支指導援員との関わりを通して、不登校生徒の社会性を育むことができた。

課題

学習意欲が全く感じられない生徒への手だてである。2学期になり、不登校生徒だけでなく、学習に不安がある生徒も別室を利用するようになった。

居場所づくりからはじめる継続的な登校を目指す

不登校生徒の状況

小学校3年生から不登校で、集団生活が苦手、保護者と離れたくない等の実態がある。中学校入学後も不登校傾向である。中学校1年生では、週1日ペース、中学校2年生では週3日ペースで登校し、校内別室で過ごしている。平仮名・片仮名は読めるが、計算や、時計を読むことは苦手、自分から話すことは少ない。

具体的な取組

○校内別室の活用

校内別室を図書室に設定し、登校しやすい環境にして、週3日開放した。校内別室指導支援員が常駐しているため、体調や気分等、当該生徒のペースに合わせて登校できるようにし、登校した際は時間と名前を記入するようにした。登校に慣れることを第一とした。

○別室が居場所になる取組

生徒同士、校内別室指導支援員や教員との良い関係ができ、安心できる環境をつくるため、ゲームや（カード・ボードゲーム）話す時間をつくるようにした。

担任や学年教員も出入りし、教室での出来事を伝え、いつでも教室に行くことができるようにした。

○不登校対応巡回教員による学習・ゲーム・昼学活などの活動

別室での活動は生徒の自主性を尊重しているが、不登校対応巡回教員が生徒との何気ない会話から、読書やゲームなどで気持ちを落ち着け、学習できそうな気分のときは学習を促すこともある。



○クラスの友人や担任とのつながりの継続

給食を食べる日には、クラスの友人が届けて言葉を交わし、生徒との関わりを継続してつくっている。学校、学年行事への参加は前向きなので、事前に担任から連絡をし、参加希望の行事に関しては、事前の学習ができるように準備を進めた。

成果

校内別室に週3日とも登校できている。他学年の生徒と積極的に関わるが増え、以前に比べて自分の意見を相手に伝えることができるようになってきている。

課題

自分が働いて保護者を守りたい気持ちが大い。そのために進路や学習の支援を行う。

学習の遅れを原因とする不登校生徒の対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 4 年生から、教室に入ることができなくなった。その後、不登校となり、別室などを使用することもでき、得意なことや好きなことに関わる学校行事には参加することもできていた。中学校入学時には、保護者も不登校が続くと予想し、給食の手続きをしない状況があった。

具体的な取組

○別室での自主学習

入学当初は教室に入り、授業を受けることができていたが、次第に学習に対する遅れを不安に思うことで、教室に入れなくなった。そこで、授業の時間には、別室で小学校 4 年生の学習ドリルを進め、校内別室指導支援員は学習補助を行い、対応してきた。

○校内別室指導支援員などとのコミュニケーション

コミュニケーションが苦手で、自己表現が苦手なため、トランプなどのゲームを一緒にすることで、笑顔を見せるようになった。また、同じように別室を利用する生徒と共に、ゲームをするなどの場面もつくっている。



○達成感を味わうことができる取組

簡単なパズルや知恵の輪などに、自分一人で挑戦させる。一つ一つ作品を完成させた時にはしっかりと褒め、作品を飾るなどして、小さなステップを乗り越える度に、評価することで自己肯定感を高める取組をした。



○ステップアップへの助言

小学生のときには、得意なダンスや絵、手芸などの授業に参加し、一緒に活動することができていたという状況を鑑みて、興味のありそうな教科や単元の時には声をかけて、教室で授業を受けるなどの取組を行い、美術の作品制作や、家庭科の裁縫などを行った。

成果

友達と登校し、朝の学活に参加し、昼には教室で昼食をとり、帰りの学活にも教室で参加するなど、小学校の時と比べ、登校回数は増えた。また、友達ともうまく関われるようになってきた。さらに、保護者の表情も明るくなってきた。

課題

楽しいことに興味をもち、学習に対する意欲が低くなっていること。その際の言葉かけなどが課題である。

自己肯定感とコミュニケーション能力アップを目指した支援

不登校生徒の状況

中学校入学後から2年生の2学期途中までは、通常どおり登校していた。
2年生の2学期途中から突然、教室に入ることを拒むようになった。
原因は不明であり、別室指導による対応を継続している。

具体的な取組

○校内別室の活用

校内別室を校舎1階に設置し、登校しやすい環境にした。週4日は校内別室指導支援員が常駐しているため、生徒は自分のペースに合わせて登校することができる。利用状況は、校内別室指導支援員が記録した「支援ノート」を介して、全教職員が共有できるようになっている。



○別室を居場所にする取組（学級との関わり）

学級内の仲の良い生徒と共にトランプ、ジェンガ、ゲームなどを行うことができるよう、校内別室に学級の生徒を招待し関わりを継続できるようにした。同学年の生徒との交流を通して、話し方や接し方を学ぶことができています。

また、以下の別室の整備をしている。

- ・外から見えないようカーテンをする。
- ・生徒同士の交流が生まれるよういくつか机を付け、島をつくる。
- ・時程表や時間割などを掲示する。



○不登校対応巡回教員の役割

別室で不登校生徒への学習指導や相談等を通して、不登校生徒との信頼関係を築いている。

別室にも登校することができない、不登校生徒に対しては、家庭訪問や手紙による交流などを行い、つながりを継続する取組を行っている。

○教員向けの研修・情報提供

不登校対応巡回教員連絡会等で得た、不登校に関する情報を基に研修を実施したり、情報共有を行ったりして、学校全体の不登校支援の充実を図った。

成果

週4日、校内別室に登校することができている。学級の生徒との関わりを通して、以前に比べて自分の意見を相手に伝えることができるようになっている。

課題

学級復帰に向けて、今後どのような対応をしていくべきか、専門家の知見を得られるような会議を設定することで、より充実した不登校対応とする。

全教職員で対応する不登校生への支援徒への対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から不登校の状態が続いており、本校入学後も入学式を終えると不登校の状態になった。性格は明るく、コミュニケーションを取ることでもできるが、ゲームなどで深夜まで起きていることも多く生活習慣が乱れており、通常登校が難しい。また、学習習慣も身に付いていない状態である。

具体的な取組

○不登校生徒の情報共有

登校支援コーディネーターが中心となり、不登校生徒の情報共有を実施

不登校生徒に関わる教員、校内別室指導支援員、SC、SSW等での共有
各教職員によるアセスメントの検討

○教職員への情報提供

都の不登校対応巡回教員連絡会での情報や各巡回校での取組などを、教員に情報共有することで、不登校の取組の充実を図っている。

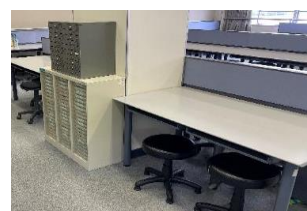
対面での共有だけではなく、紙面での共有など、短時間で共有できるよう工夫している。

○不登校対応巡回教員による家庭訪問

週1回家庭訪問を行っている。本人と会って健康状態の確認、保護者から家での様子を聞く。訪問前には学年主任・担任から配布物や伝達事項がないか確認する。訪問後の様子をその日のうちに学年主任・担任に連絡する。

○別室対応による不登校生徒の支援

校内別室指導支援員と連携し、不登校生徒の支援を検討することで、一人一人のニーズに応じた対応ができて



成果

令和6年11月現在の不登校出現率は、前年度の10.9%を4.5ポイント下回り、6.4%となっている。

3月までの間にこの数値でとめられるよう、上記のような取組を、全ての不登校生徒に行えるよう努力していく。

課題

登校をするようになった生徒が継続的に登校するようになるまでには時間がかかるため、丁寧な指導を続けていく。

不登校生徒対応の校内における取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、生活リズムの乱れ、学習面の遅れなどの複数の要因から小学校の頃から不登校傾向であった。中学校入学後は、1学期は休みがちで週1日登校できることがある。不登校生徒への取組を継続して実施したことで、ほとんど休まずに登校できるようになった。

具体的な取組

○絆づくりの取組

「絆づくり」の取組として、生徒会が主体となり、昼休みに体育館を利用した、異学年の交流イベントを開催した。

- ・「円陣パス選手権」
- ・「フリースロー大会」
- ・「クイズ大会」など



○不登校対応巡回教員による面談

月3日程度の欠席があった生徒から、支援会議において、その日に面談する生徒を決める。面談をする生徒は、SC相談室にて10分程度の面談をする。面談結果は教員と共有する。1度面談をすれば、校内で見かけたときに声かけをするきっかけになる。生徒によっては複数回面談を行うこともあり、回を重ねるごとに悩みや困っていることを話してくれることが多い。

○個別学習の取組

週1回、希望者を対象に、別室で小学校の内容の復習（算数と漢字）する時間を設定している。小学校の学習が積み上がっていない生徒が、スモールステップで自信を付けられるようにしている。

- ・簡単な問題やプリントを用意し、復習から始めた。
- ・WEB上の問題集を活用した。

○関係機関との連携

不登校対策委員会にSSWが同席するなど、関係機関との連携を密にしている。不登校対応巡回教員は、SC・SSWのような心理職・福祉職とは異なる立場を生かし、学校内外の連携をより円滑なものにするために客観的な視点を生かした助言や活動を行っている。

成果

登校頻度が上がったことで、クラスメイトとの交友関係が深まり、学級が本人の中で安心できる場になりつつある。登校できるようになってからも不登校対応巡回教員との面談を継続的に行い、本人の変化にすぐに気付いて対応できる体制を整えている。

課題

学習面の遅れはいまだに大きい。個別学習や放課後の補習教室などで個別最適な学びを実践していく。

「つながるプラン」～学校での登校支援～

不登校生徒の状況

対象生徒は、学習や生活に不安があり、校内別室の設置を知るまでは、不登校であったが、校内別室を活用して登校することができている。

具体的な取組

○不登校対応巡回教員による巡回

【役割】

- ・連絡会や他校の取組、研修等で得た情報の共有
- ・教職員や校内別室指導支援員、S C等との連携
- ・生徒に対する指導、相談
- ・不登校対応情報の実態把握、分析、対応の提案

【勤務】

- ・水曜日午後+木曜日 ※その他は他校を巡回

○校内別室での対応

校内別室にて、不登校生徒への学習指導・支援を行い、学習面の支援を行った。

第2・3学年の生徒の中には、進路に関する不安を抱えている生徒も多く、進路選択などの相談にも柔軟に対応し、誰もが安心して使える居場所を目指した。



○教員研修等の実施

「居場所づくり」と「絆づくり」の2本の柱についての研修会を実施し、「魅力ある学校づくり」に向けた意見交換を行った。

不登校生徒との関わりや対応に関する担任からの相談に対応した。

不登校対応巡回教員連絡会での情報を整理して、教員に情報共有している。

校内別室の手引き

【活用】

保護者・子供との面談時など

【内容】

入室前に保護者の
願いや生徒の目標、
ルールについて確認

成果

令和5年度まで、不登校だった複数の生徒が不登校巡回教員や支援員との関わりを通して、別室に登校することができるようになり、生活習慣も改善することができた。

「交換連絡ノート」など、不登校生徒との連絡手段や教員との情報共有などを確立することができた。

課題

利用する生徒、一人一人のニーズに応じた適切な支援を行う。

個々の悩みに応じた相談体制を構築する。

不登校生徒支援に関する校内別室支援の様子について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校から学力不振等による学習意欲の低下が原因で不登校傾向であった。中学校入学後も教室では学習意欲をもてず、週 1 日の別室支援を始めた。個別支援により学習意欲が向上し、相手の気持ちや状況を理解して、自分の気持ちや考えを言葉で伝えられるようになることが目標である。

具体的な取組

○生活アンケートの実施

毎月 1 回、生活アンケートを実施している。その結果から生徒の悩みや、つまずきに早期に気付き、スクールカウンセラーや校内別室指導支援員と対応策の検討をしながら、学校生活を充実して意欲的に送れるようにしている。

○魅力ある学校づくり

学校行事等を活用した、魅力ある学校づくりのアイデアを教員と検討し、実施した。



○不登校巡回教員による不登校生徒への支援

校内委員会に参加し、不登校生徒に関する情報の共有や支援の検討、連絡会や研修で得た情報の共有を行う。

また、三者面談に同席し、保護者に向けて登校支援の提案を行う。

その他、校内別室において、支援員と協力をしながら不登校生徒の居場所の取組を行っている。

○誰もが通いやすい別室の環境づくり

別室を 1 階昇降口前に設置し、教室に入りやすい環境を整え、さらに不登校対応巡回教員と校内別室指導支援員が連携して常に在室している状況をつくることで、不登校生徒が安心して登校できるようにしている。

成果

集団で過ごすことが難しい生徒が、別室登校を通して安心して登校でき、落ち着いて個別学習に取り組んでいる。学習意欲につなげることができている。また、校内別室指導支援員とのコミュニケーションを取ることで社会性を育むことができている。

課題

別室に登校することが難しい生徒への支援や、学習意欲が低い生徒への支援が課題である。